

日系アメリカ人研究
—ダニエル・イノウエの活動の源泉を探る—

野呂 浩*

A Study of Japanese Americans
— Searching for the Roots of Daniel Inouye's Actions —

Hiroshi Noro*

Daniel Inouye, a Nisei Japanese American, suffered from various forms of discrimination against Japanese Americans, particularly so after the Pearl Harbor Attack. In order to be accepted and to be a good American, he finally chose fighting in the army against his parents' country, Japan. A large number of Nisei joined the army to show loyalty toward their own country, the U.S.A. by their blood, and Daniel Inouye was among them.

Returning from the World War II as a member of the 442nd Regimental Combat Team, he was warmly welcomed by the general public, but in a certain barber shop, a barber refused to cut his hair using discriminatory terms, "We will not cut Jap's hair!!" He was so shocked to see this kind of racial discrimination still alive even after so many Japanese Americans gave their lives for their own country.

This kind of discrimination made Daniel Inouye work to solve prejudices against Japanese Americans as a lawyer, a Nisei member of the U.S. House of Representatives, and also as a Nisei U.S. Senator.

One of his biggest joys was that HR 442 became a law and the Congress and the President formally apologized for the removal of Japanese Americans from the West Coast (in 1942) and provided monetary compensation to the surviving internee in 1988. Even after this historic law, he has been very active in creating understanding and friendship between the two countries, Japan and the U.S.A. Today he continues his mission of creating security and peace around the world.

Through various hardships against Japanese Americans, the Nisei Daniel Inouye realized fully that no discrimination should exist regardless of race. He also realized that every person has individual rights, if they are to be the same as Americans, their life, liberty and the pursuit of happiness should be guaranteed. This coincides with the spirit of the Declaration of Independence : "We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness...."

Therefore, it can be concluded that all the terrible experiences as a Japanese American made Daniel Inouye a fighter: Samurai of justice, freedom and equality, having universally accepted values, not just for the U.S.A. interest only, but for the sake of countries around the world.

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授
2009年9月15日 受理

I

ダニエル・イノウエは、日系アメリカ人の中でも際立つ活躍をした人物の一人として知られている。日系アメリカ人部隊の一兵卒として戦場へ赴き、戦後は弁護士となり、ハワイの指導的な政治家、連邦下院議員を経て、連邦上院議員に選出される。⁽¹⁾

彼のこのような生き様は、一見彼自身の個性的な思想やビジョンに基づくものであると看做したくもなる。しかし、そのルーツを探ってみると、日系アメリカ人の置かれた特殊な歴史的状況の中で、日系アメリカ人であることを常に意識しつつ、差別されないアメリカ人になることを目指して行動する、ダニエル・イノウエの実像が見えてくる。

ダニエル・イノウエの行動の背後に厳として存在する日系アメリカ人の歴史との絡みを踏まえた上で、彼の日系アメリカ人としての生き方を眺めつつ、その行動原理を探り、解明するのが本論文の目的である。

II

1941年12月7日（日本の12月8日）の日本軍による真珠湾攻撃後、1943年3月に、ダニエル・イノウエは日系アメリカ人部隊に志願する。そして、軍隊生活で、人を殺す非人間性、残虐性、残酷性を知るようになる。ある農家に忍び込んでいたドイツ兵が、撃たれてもう少して意識がなくなる寸前であった。その兵隊が、自分の上着に手を突っ込む仕草をする。ダニエル・イノウエは、当然、ピストルを抜く行為と判断して、ライフル銃で止めの三発を撃つ。すると、絶命したドイツ兵の片手が上着から上がり、その手にはスナップ写真が握り締められていた。それは妻と子供二人の写真であった。⁽²⁾ 上着に手を突っ込んだのは、実は妻と子供の写真を上着から取ろうとする行為だったのである。⁽³⁾ ダニエル・イノウエはこの兵隊の顔は記憶していないが、例の写真を持った手だけは、どうしても記憶の中から払い除けることが出来なかった。そこで、彼は従軍牧師に会い、兵隊であることに誇りを持っているが、腹ぺこの犬や病気の猫の面倒をみるような家で育てられたので、兵隊を殺すことに慣れるのは到底出来ない、と告白している。⁽⁴⁾ 日系二世アメリカ人兵士の英雄である、ダニエル・イノウエは、日系アメリカ人戦闘部隊の第442連隊の一員として、数々の

武勲を残した。

ダニエル・イノウエは、ドイツ軍に包囲された、失われたテキサス大隊救出の命令を受け、救出作戦に参加した。1週間の戦闘で814人の死傷者を出しながらも、敵軍を突破し、テキサス兵211人全員を救出するという偉業を成し遂げる。⁽⁵⁾ そして、軍隊は民主主義的組織などではなく、頭が命令を下せば、他のすべてが動かざるを得ない組織である。そして、腕であり、脚であり、内臓である部下が殺害されるのが戦争である、という現実を思い知らされる。⁽⁶⁾ 1945年4月21日には、戦闘で三回負傷し、右手を失う。⁽⁷⁾

アメリカ陸軍で、第442連隊ほど多くの勲章をもらった部隊は存在しない。殊勲十字章47個、名誉勲章1個、部隊表彰状10個、個人勲章3915個を授与されている。しかしながら、犠牲者も異常に多く、約700人の戦死兵、1700人の身体障害兵と重傷兵、死傷兵は全部で3600人にも上った。⁽⁸⁾

ダニエル・イノウエは、戦争の醜さを思い知らされただけでなく、戦闘で自らの右手をも失ってしまう。そのような残虐極まりない軍隊に、なぜ志願しなければならなかったのか。それは、日系アメリカ人に向けられる差別的視線・行為を根絶するためであったが、反抗的手段ではなく、むしろ自らを犠牲にする手段を選択した、⁽⁹⁾ と捉えるのが普通である。

アメリカ西海岸の日系アメリカ人が収容された十か所の転住所では、志願兵募集のために、忠誠心を質問表で確認する忠誠登録が実施された。よく知られている二つの質問がある。まず、第二十七問は、「あなたは合衆国軍隊に入隊し、命ぜられたいかなる戦闘地にも赴き任務を遂行する意思がありますか (Loyalty questionnaire: Question #27: Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty, wherever orders? YES NO)」、そして、もう一つの第二十八問は、「あなたはアメリカ合衆国に対し、無条件の忠誠を誓い、内外のいかなる武力による攻撃からも合衆国を忠実に守り、日本国天皇、あるいは他の国の政府や権力組織に対し、あらゆる形の忠誠や服従を拒否しますか (Loyalty questionnaire #28: Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any and all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of

allegiance or obedience to the Japanese Emperor or any other foreign government, power, or organization? YES NO)」という内容であった。⁽¹⁰⁾ 第二十七問は、徴兵対象年齢の二世たちに対する兵役志願の督促であり、第二十八問は、一世に日本を捨て、アメリカに忠誠を誓わせる目的であったことは明らかである。17歳以上の登録対象者約7万8千人のうち、84%の答えが両質問とも YES であった。⁽¹¹⁾ ハワイでは、このような質問表での忠誠登録は行われなかったが、⁽¹²⁾ アメリカ人としての忠誠心を示すためには、やはり兵に志願する道を選択せざるを得ない厳しい状況があった。

真珠湾攻撃の後、軍に志願する資格を与えられたダニエル・イノウエは、3 マイル (約 4.8 キロメートル) 離れた徴兵局まで走って行き、初日 1000 人近く集まった二世志願兵の最初の 75 名の中に入る。⁽¹³⁾ 喜び勇んで走る姿は大変頼もしい行為と理解したくもなる。しかし、親の祖国である日本が、自分が生まれた国であるアメリカを攻撃し、自身は軍に志願するのである。やはり内面は複雑だったのではなかろうか。

ダニエル・イノウエは日系二世なので、アメリカ人ではあるが、日系アメリカ人であるが故に、この軍志願は他人事ではない。そうした状況の中で、4.8 キロも走って徴兵局まで向かうのは、あまりに痛々しい行動に見えない訳でもない。攻撃した国が自分の親の祖国であるため、自分がアメリカ人としてアメリカに忠誠を示すには、兵に志願する以外にないと判断しての行動である。とするならば、アメリカ人ではあるが、日系アメリカ人であるが故に迫られた選択肢である。よく指摘されるように、多くの日系アメリカ人は自分たちの血を以て忠誠を示し、アメリカ市民として認められる道を選択した。⁽¹⁴⁾ ダニエル・イノウエも例外ではない。

それでは、並のアメリカ人と認めてもらうために、命を賭けて戦争に参加し、勝利して帰国した後、どこにおいても歓迎され、日系アメリカ人に対する差別は消え、勝利の喜びを噛みしめたのか、と言うと決してそうではない。サンフランシスコ市郊外のある理髪店に行った際に、ダニエル・イノウエは想像を絶する屈辱的な扱われ方をされる。理髪店は何と、貴様みたいなジャップの頭は刈らない、と言って断るのであった。ダニエル・イノウエは、こんな奴の

ために命を賭けて戦ったのかと愕然とする。⁽¹⁵⁾ 血を以て忠誠を示す戦いをして、このような有様である。ダニエル・イノウエは日系人であるが故の差別、蔑視がまだ厳然と存在する現実を目の当たりにする。

戦争で右手を失ったので、当初希望していた外科医の道を断念し、やがて、弁護士を選び、連邦下院議員、連邦上院議員へと歩み続ける。法律は人間が制定するものである。法律をつくる力になりたい、政界にも進出できるように弁護士になりたい、⁽¹⁶⁾ というダニエル・イノウエの決断は理解出来る。

日系アメリカ人であるが故に、軍に志願し、日系アメリカ人に対する蔑視、差別、偏見を振り払うために、命を賭して戦った日系二世は多い。確かにそうした多くの軍功によって、日系アメリカ人に対する評価が変わったことも事実である。しかしながら、依然として日系アメリカ人への差別が存在することから、差別を根絶する活動への決意が強まり、弁護士を目指し、法律をつくる政治の世界に向かおうとする決断に繋がるのである。

III

ダニエル・イノウエは、兵役を終了した後、ハワイ大学で政治学と経済学を学び、その後、さらにジョージ・ワシントン大学ロー・スクールを卒業し、ホノルルで法曹界に入り、弁護士事務所を開設。そして、ハワイが州に昇格した 1959 年には、アジア系アメリカ人初の下院議員に選出され、3 年後の 1962 年には連邦上院議員に初当選する。⁽¹⁷⁾

当然、ダニエル・イノウエの議員活動の目的の一つは、日系アメリカ人への差別を撤廃することである。日系アメリカ人への差別を解消するための働き of 大きな結実は、戦時中に強制収容された日系アメリカ人に対する「戦時補償法」の成立である。

戦時民間人転住・収容に関する委員会が 1981 年に最初の公聴会を開催し、その後、第二次世界大戦中に行われた日系人の強制収容は、人種の偏見、戦時の狂乱、さらに政治指導の過ちに基づくとの報告書を議会および大統領に提出している。そして、1988 年 8 月 10 日、レーガン大統領がついに、強制収容に対する補償を記した「市民自由法」に署名し、アメリカ政府が公式に謝罪し、1 人 2 万ドルの補償金が、被強制収容者に支給される。⁽¹⁸⁾ しかし、な

かには、金銭では決して解決できない、奪われた自由を問題にしているとして、2万ドルの受け取りを拒否する者もいた。⁽¹⁹⁾

ダニエル・イノウエは1983年に連邦上院で、「否定された個人の正義」について発言しているが、日系アメリカ人の排斥、立ち退き、抑留は不当であることを指摘し、同じアメリカ人である同胞が40年前に体験させられた辛苦に値段が付けられようか。さらに、自分が兵隊のとき、収容所を訪ねて有刺鉄線を見たとき、これがアメリカなのか、と思った次第を述べている。⁽²⁰⁾ そしてついに、1988年4月20日、上院、下院法案第1009号、日系アメリカ人強制立ち退き賠償法案が可決するのである。⁽²¹⁾ 5年がかりで実現したこの法案は、第442部隊の名誉を記念してHR442と称される。⁽²²⁾

日系アメリカ人への人種差別を根絶したいというダニエル・イノウエの願いが法律となった瞬間である。日系人強制収容の非を認めさせるには多くの年月がかかったが、ついに賠償法案が通過したのである。この法案成立は、ダニエル・イノウエをはじめとする日系アメリカ人による、アメリカ自身の不正を糾す行為であった。

第442連隊は、敵軍および人種偏見とも戦って勝利したと言われる。確かに、日系アメリカ人に対する人種の偏見をなくすための戦いであったことは事実である。⁽²³⁾ ダニエル・イノウエはこの法案成立で、アメリカ国家の人種差別を裁いたのである。アメリカらしからぬ過去を清算させた活動なのである。戦争において日系アメリカ人は勇猛果敢に戦ったが、アメリカ建国の精神の根幹とも言える、人種平等を実現する戦いにおいても、ダニエル・イノウエをはじめとする多くの日系人の並々ならぬ血の滲むような努力があったことは歴史が証明している。日系アメリカ人として命を賭して戦った体験が、ダニエル・イノウエを、並のアメリカ人と看做されたいという願いや、日系人に対する人種差別解消というレベルを超えて、アメリカ国家自体の根幹に係わる、人種によらず、自由、平等であるとするアメリカ的価値観による国家の再構築をする戦士に仕立て上げたのである。

IV

それでは、ダニエル・イノウエが並のアメリカ人

として受け入れてもらうために戦地に赴き、さらに、戦後にはアメリカの本来の国家作りに専念するだけで、親の祖国である日本に全く関心も持たなければ、関わりもなかったかと言えば、そうではない。1960年9月、東京で開催された列国議会同盟にアメリカ代表として参加した際に、駐日アメリカ大使の特別な計らいで、福岡県の先祖の古里の横山村（現・八女市）を訪ねる機会が与えられる。猫の額ほどの中庭しかない茅葺きの先祖の家を自分の目で見、墓参りもする。出迎えてくれた親族とも親しく語り合う。ダニエル・イノウエは、過去の歴史が押し寄せてきて、体内を駆け巡る思いに駆られた、と述懐している。東京に戻るジェット機には、村人から頂戴した日本刀を持って乗り込む。⁽²⁴⁾ 親の祖国、自分のルーツである日本の村との初めての邂逅である。あらゆることを、自分が日系アメリカ人であることを第一に考え、日系アメリカ人とアメリカ国家のために生きてきたダニエル・イノウエであるが、自分のルーツに触れ、日本への何らかの思いが、ダニエル・イノウエの心と体内を、駆け巡ったのではなかろうか。

ダニエル・イノウエの対日活動をすべて拾い上げることは困難であるが、2005年に、全米日系人博物館関連の仕事で来日している。この全米日系人博物館は1992年に、ロサンゼルスに開館。日系アメリカ人の辛苦の歴史を記録し、伝えることで、アメリカの人種と文化の多様性に対する理解を深めることを目的とする博物館である。ダニエル・イノウエは、「博物館は確かに日系アメリカ人によって建てられました。しかし、同様の体験を共有する他のアメリカ人たちも、その建設に参加しました。この博物館はアメリカ人によって建てられた、アメリカの博物館です。そこに意義があるのです。」⁽²⁵⁾ と、この博物館の紹介をしている。アメリカ人によって建てられたアメリカの博物館であると、アメリカを強調しているのにもかかわらずダニエル・イノウエらしい。日系アメリカ人の歴史はアメリカ史ではあるが、日本史の延長でもある。このような歴史を、アメリカ人だけではなく、日本人にも知ってもらうために、日本各地で全米日系人博物館主催、共催の各種セミナーが開催されている。

さらに、ダニエル・イノウエは、日本の多くの議員との交流も深め、軍事、外交、経済、その他すべ

てにおいて、日本はアメリカの一番のパートナーであると認識し、議員活動を展開している。⁽²⁶⁾

近年、日米両国間で特に大きな話題になったのは、アメリカ下院が、第二次大戦中の従軍慰安婦問題で、日本政府に対して、公式謝罪を要求したことである。この際、決議そのものが事実に基づいていない、且つ日米関係を悪影響を与えかねず、さらには、この件については歴代首相が既に謝罪しているとして、ダニエル・イノウエは明確にこの決議に反対する声明を上院に提出している。⁽²⁷⁾

ダニエル・イノウエは、日本に対して強硬な意見の持ち主である政治家として知られてきた。しかし、アメリカの国益を十分検討、認識した上での活動であろうが、日本の存在を視野に入れ、あらゆる機会を捉えて日本との友好・親善関係を深めようとする一面があることも否定出来ない事実である。

V

最初にアメリカに渡った日本人は、1841年のジョン・万次郎である。土佐の漁船が漂流し、アメリカの捕鯨船に救助され、ホノルルに入港。その後、アメリカに渡った人物がジョン・万次郎と呼ばれる中浜万次郎であった。

通常、アメリカへの日本人の移民史は、5つの時期に分けられる。すなわち、「移民初期」(1841年～1899年)、「移民と排日運動期」(1900年～1936年)、「太平洋戦争と強制収容期」(1937年～1945年)、「戦後復興期」(1946年～1965年)、「補償運動期」(1966年～)である。⁽²⁸⁾

ダニエル・イノウエの祖父母、井上浅吉とモヨ夫妻は、一家の失火による弁償の大金をつくるために、1899年9月28日、福岡県八女郡横山村からハワイへ出立する。ダニエル・イノウエの自伝によると、500年も前に横山村をつくったのは井上家の一人で、武勇を揮った侍であつたらしい。夫妻は一人息子の兵太郎(ダニエル・イノウエの父)をハワイに連れて行く。⁽²⁹⁾

ダニエル・イノウエの祖父母のハワイ渡航は、5期の分類によると、かろうじて移民初期に入る。とするならば、ダニエル・イノウエの祖父母の時代から眺めると、イノウエ家は5つのすべての区分の時代を生き抜いてきたことになる。ダニエル・イノウエが生まれたのは、1924年9月7日である。この時

期は第2期であるので、ダニエル・イノウエ自身も、2期からのすべての区分期を生きてきた訳である。このような意味で、イノウエ家の歴史は、まさに日系アメリカ人の移民史そのものと重なる。

ダニエル・イノウエは、日系アメリカ人に対するあらゆる差別の辛苦を味わい、軍人として戦い、尚、戦後の差別体験等によっても、アメリカ人であるならば、人種が異なっても平等でなければならない、そして、すべてのアメリカ人は、同じ自由を持ち、生命が尊重されなければならない、自分たちも様々な幸福を追求する同等の権利がある、ということを心底より願い信じて、あらゆる活動を展開してきている。

このように考察してみると、アメリカの独立宣言の文言を思い出す。アメリカ独立宣言の冒頭の有名な言葉は、「すべての人間は平等に創造されている(The unanimous declaration of thirteen United States of America: We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal,...)」である。さらに、「すべての人間は決して奪われることのない諸権利を神授されており、そのなかには生存や自由、そして幸福の追求が含まれる(The unanimous Declaration of thirteen united States of America:...that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.)」と記されている。ダニエル・イノウエは、独立宣言に謳われている精神、人間観を、日系アメリカ人として実に辛い体験の中を潜り抜ける過程の中で、自らの行動原理として、しっかりと内面に育み、植え付けたのである。

ダニエル・イノウエの議員としての諸活動を眺めるならば、アジア人とアメリカ人の交流を目的とする、ハワイのイースト・ウエストセンター設立にも見られるように、⁽³⁰⁾ この行動原理をアメリカ一国の国益のためではなく、普遍的な行動原理と捉えて、議員活動を継続しているように思われる。

結局、日系アメリカ人への差別、偏見に基づくあらゆる辛い体験そのものが、ダニエル・イノウエの内面に、アメリカ的価値観、及びアメリカ一国の国益にとどまらず、独立宣言の精神とも重なる普遍的な価値観を育み、その価値観に基づいて、国境を越えてあらゆる偏見・差別に対して戦い続ける正義の戦士・サムライに変身させた、という事実を指摘し

て筆を擱く。

注

- (1) ダニエル・イノウエ著 森田幸夫 訳『ワシントンへの道』 彩流社 1989年 p.11
- (2) 『ワシントンへの道』、pp.176-177
- (3) 『ワシントンへの道』、p.440
- (4) 『ワシントンへの道』、p.178
- (5) 島田法子『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』現代史料出版 2004年 p.87
- (6) 『ワシントンへの道』、pp.190-194
- (7) 『ワシントンへの道』、p.455
- (8) 『ワシントンへの道』、p.231
- (9) 『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』、p.98
- (10) デイ多佳子 『日本の兵隊を撃つことはできない―日系人強制収容の裏面史―』芙蓉書房出版 2000年 p.56
- (11) 『日本の兵隊を撃つことはできない―日系人強制収容の裏面史―』、p.89
- (12) 『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』、p.86
- (13) 『ワシントンへの道』、p.116
- (14) 『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』、p.88
- (15) 『ワシントンへの道』、pp.291-292
- (16) 『ワシントンへの道』、p.269
- (17) アケミ・キクムラ・ヤノ編 小原雅代 他 訳『アメリカ大陸日系人百科事典―写真と絵で見る日系人の歴史―』明石書店 2002年 p.386
- (18) 多文化社会米国理解教育研究会編『移民を授業する―日系アメリカ人学習活動の手引き―』2007年 p.9
- (19) 野崎京子『強制収容とアイデンティティ・シフト―日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』世界思想社 2007年 p.79
- (20) 『ワシントンへの道』、pp.435-438
- (21) 『ワシントンへの道』、pp.467-468
- (22) 『強制収容とアイデンティティ・シフト―日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』 p.78
- (23) 『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』、p.98
- (24) 『ワシントンへの道』、pp.399-402
- (25) <http://www.janm.org/jpn/general/history.html>
- (26) <http://www.hokubei.com/ja/news/2009/07-17>
- (27) <http://blog.canpan.info/sasakawa/archive/963>
- (28) 『移民を授業する―日系アメリカ人学習活動の手引き―』、p.1
- (29) 『ワシントンへの道』、pp.20-27
- (30) 『ワシントンへの道』、p.420